

ケイト・ミレットによるD.H.ロレンスの小説批判 ——父権制という観点から——

須 田 理 恵

Patriarchy in D.H.Lawrence's Novels from the Viewpoints of *Sexual Politics* by Kate Millett

Rie Suda

Abstract

Sexual Politics by a radical feminist Kate Millett coped with D.H.Lawrence's novels on different terms than done in the past. It is true that the biographies of Lawrence's admirers had a great impact on the formation of Lawrence's criticisms in the past.

While in *Sexual Politics* Millett criticized the mechanisms of patriarchy of Lawrence's novels which was utilized intentionally by the author in order to dominate females by the use of sexual power.

On the other hand, Lawrence called his literature 'art for his sake' as he thought his art was personal and that his fate stigmatized him as a writer.

After a close comparison I came to the conclusion that Millett as well as Lawrence considered patriarchy as a system which inevitably involved the modern in the male dominant systems. Both writers thought that such a mechanism as patriarchy should be destroyed in order to aid restoring health to males and females who suffer under the morbid modern systems.

序

ラディカル・フェミニズムの旗手ケイト・ミレット (Kate Millett) は、*Sexual Politics* 『性の政治学』でロレンスやヘンリー・ミラー等の性描写に焦点をあてて、何世紀にも互る西洋の父権的伝統を貫く男と女の支配的構造を喝破したのだった。¹ ラディカル・フェミニズムの画期的なことは「従来私的なものとされて

きた家族、個人生活を政治的議論の場にもちこんだ」ことである。²

確かにその後『性の政治学』は様々に論じられた。「男性優位がなぜ確立し、どのようにして継続してきたのかを説明することなしには、それに終止符を打つための戦略をたてることはできないのである」³という批判もその一つであった。また、ロレンスの小説を家父長制だけで批判することはあまりに一枚岩であるとも批判された。ミレットのロレンス批判は多分にロレンスを祭壇に祭り上げた伝記⁴を土台にした一枚岩の背景をも突き崩すこととなった。だが、ミレットのロレンスの小説に対する細部に互っての批判の論点が同時に『息子と恋人』から出発して『虹』、『恋する女たち』を経て『チャタレー夫人の恋人』へ至った、母に強く影響された息子の辿った前人未到の軌跡を小説というジャンルに詳らかにした「業績」を無視することにもなった。ロレンスはそれらの小説の成立過程で、従来考えられてきた女の「母」に対する役割に疑問を呈し、「母」に強く影響された自己を反省すべく、自らの文学を「自分自身のための芸術」⁵と述べ、その芸術はだれのためでもない自分「個人」のものであり、作家であることをその使命を果たすための「宿命」と捉えていたのだった。それゆえに、ロレンスの文学をミレットのように、「エゴイスティック」や「男性優位」の思想の持ち主と断定してしまうにはあまりに性急過ぎ、男性優位という言葉で表現するにはあまりあるものがあると考ええる。

とにかく、ミレットにはこれまで無意識のうちに、考慮もされなかった「男」の思い込みの女性像を覆すことに力あり、それが「母性」そのものの神話の破壊にまで繋がることとなった功績は大いなるものがある。さらに言えば、ミレットがロレンスの小説を使用して思い込みの女性像を覆したことは、ロレンスが小説で試みた、旧弊な制度から人間を脱却させ、新しく生き返らせるというロレンス自身が試みた「実験」に通底している。

奇しくもロレンスの文学批判から噴出した家父長制という問題は、ロレンスが現代文明の狭間でその歯車に否応なく組み込まれた「男」や「女」の赤裸々な姿を小説の中に描いて、そのメカニズムが「制度」と化していると批判したとき、ミレットとロレンスはその疲弊しきった現代文明批判において軌を一にしていたのである。

1. ロレンスと父権制

ミレットのロレンスに関する文学批判はイデオロギー、生物学、社会学、階級、経済・教育、暴力、人類学・宗教、心理的基盤から考察されており、女性が権力

を持っているように見えてもその影で操るのは男性であるという傀儡政権に似た批判まで水も漏れない「制度」の批判が網羅されていることが注目に値し、いかなる論客もこの批判を覆せない縄が張り巡らされていることを特色としている。だが「制度としての父権制はあらゆる代表的宗教に浸透しているのと同様に、カーストや階級、封建制や官僚制など、あらゆる政治的、社会的、経済的形態を貫流するほどに深くいきわたった社会的不変数である一方、時と所によって非常に多様性を見せている。」⁶ と言うとき、ロレンスの現代文明の批判とどこか共通しているように思われるのである。

すなわち、ミレットの批判はロレンスがジェラルドやクリフォードによって制度に囚われた人間を象徴的に描いたことを決して見逃してはいないのである。「父権制」は制度疲労しているのであるが、それにかわるものが見つけれないでいるやり切れなさをミレットは次のように述べている。

「おそらく父権制の最大の心理的武器は、ひとえにそれが普遍的であり長いあいだつづいてきたということだろう。父権制と対照をなすものも（ここで女性支配性の概念がどうしても注目をあつめるわけだが）、それによって父権制を論駁できるようなもう一つの制度も、ほとんど存在しないのだ。おなじことが階級制度についても言えるかもしれないにしても、父権制はそれ以上に頑固な、あるいは強大な支配力を、まるでそれが自然であるかのようにまんまとおもわせつづけたことによって、保持している。…一つの権力体制が完全に手綱をおもいのままにしているときには、それは大声のみずからを語る必要なぞほとんどないのだ…。」(58)

2. 『息子と恋人』と母性

ロレンスの小説の中での「女性」のイメージは“Magna Mater”で象徴される強い女であり、それはロレンスの実母と結婚相手のフリーダ・ロレンスを基盤にしたものである。『息子と恋人』で夫に裏切られた女が家庭においては、次第に夫を凌ぐ強者となって子供たちを傘下に従え、社会では獲得できない力の代理作用を享受する。このような母性の力は子供にとって母の映像を良い面と悪い面に分裂させ、それは『息子と恋人』で詳細に描かれている。一見息子から母への讃歌と受け取れる内容も、実は宿命的に逃れようにも逃れられない母と子の繋がりに悪戦苦闘する子供の不幸と解釈できるのである。しかし母への憎しみは直截に顕われず、子供の行動に反映する。たとえばポールが幼少のときに「(妹の)アニー

の人形のアラベラを焼いて犠牲にする」、成長してからの母の言い付けを守れなかったための「焦がしたパンの埋葬」そして決定的な「母をモルヒネによって死に至らしめたこと」などがその象徴的な例である。⁷

「暴力的」とも受け取れるポールの行動は、直接に自分が母に悪意を抱いたから生じた行為ではなくて、息子が父が出来なかったか、あえてしなかったことを代わりにしようとして失敗したことから生ずる、自分に対する不甲斐なさを、子供心に感じてとった行動という屈折したものなのである。それゆえに、屈折した母への感情、すなわち女への感情のパターンが短編や長編に繰り返し描かれるが、それはロレンスのこころの贖いなのであり、ラディカル・フェミニズムが糾弾する「暴力を振るう夫」と共通項なのである。すなわち「息子」の心底に蟠るかような心理は現代の成人した男や夫の心底に蟠る感情と同じ物である。

今日でも結婚制度は、その本質に経済的性格を孕み、自分の関心や性向に不向きでもするために、労働者の雇用関係のような契約を結ぶことで成立している。そのような結婚の経済を支える家族の長と権威が結びついて父権制を維持し、妻は家庭に止まって子育てをすることを強いられ、妻と子供の関係はモレル夫人のように、雇用者としての夫よりも子供とより親密な関係を結ぶのである。一見自然に見える家族という関係に見られるかような不平等をミレットは「父権制」の深い刻印と言うのである。また、現代作家の分析で明かにされたミレットの言う「父権制」という烙印はもう一度、その規範（パラダイム）を見直すという作業に結びついたことも事実である。その過程で母性も考慮される結果を生じたのである。

ミレットは「モレルの妻が自立した生活をしたことが全然なく、また何かを達成する道が一切奪われている。」(248)と述べているが、たしかにその他の中期、後期の小説でも、ロレンスの小説のヒロインには社会に出るために学問をしたり、仕事に打ち込む姿は描かれていない。しかもモレル夫人が息子に対して全身全霊を打ち込む姿に時代錯誤の「母性愛」が克明に描かれているが、ポールのミリアムやクララに対する態度は、明らかな女性差別が見られるが、女性が社会進出を阻まれていることにたいする憐憫の情はかけられない。ことにミリアムがポールと同様に「階級の枠から解き放った学問を通じて、そこからのがれたいと切望して」(252)いるにもかかわらず、家庭が彼女の味方になってくれないときに、やさしい先輩の役を買って出るが、その態度はサディストのそれと変わらない。ミレットは社会学的、教育的、あるいは心理的見地からこれらの例を随所に見出してロレンスの女性に対する差別とその依って立つ「男性優位性」を指弾する。

主人公のポールが「野心が変わりばえのしない境遇からの脱出をそそのかす」

とき、それは「ポールが利用してきた女たち、彼の中産階級への出世の踏み台となってきた女たちにひどい目にあわせることになる」(248) 出世主義を見る。というのはポールは、自分に役立ってきた女たちを殺したり、捨てたりするからだ。おなじくエディプスの人間で、こうしたことがらの専門であるフロイトの述べた、「母親お気に入りの息子は『征服者』になると予言している。」を引用する。(248)

ミレットによれば、母への思慕と裏腹な憎悪が醸し出したドラマが現代の悪循環となってわれわれの前にその姿を現すのである。

3. 偉大な小説

ミレットはロレンスがポールという分身によって「出世主義」の姿を赤裸々に描写しているとして「自然主義」的「偉大な」小説とたたえている。(246) だがロレンスは「自然主義」で描いた小説をロレンスの本領とは考えていないで、それは彼が独自に考える「真の小説」の始まりであった。それゆえに『息子と恋人』の最終章は自立できない母の息子が自己から脱却すべく、夜の暗闇のなかで「時間」を失い、あるのが「空間」ばかりという虚無的な母のいない闇からひとり立ちすべく街の明かりの方へと歩いていくのである。ところがミレットは「彼の冷たさが母親の悪影響に起因するというフロイト流の説明が蛇足であると同様だ」と述べてその必要性を否定している。(257) だがミレットはロレンスの小説の真の「偉大さ」を誤解していると言えよう。ミレットの言うように、ロレンスが赤裸々に自分を曝け出すことが偉大なのではなくて、自己の欠点が赤裸々に顕されることでのみ成立するナイーブな小説からいかにして抜け出すかを主眼とした。それはまた、母から受けた影響を拭い去るべく、父の夢の「旅」を通して自己変革を小説のなかで実現することが、ロレンスの小説の成立の骨子といえるのであり、その小説の実現を「偉大」だと考えていたのである。

ロレンスの小説を『自我の芸術』で分析したHoweは「自我の心理の変遷と発展を記したもの」と述べる。『息子と恋人』で出生した主人公は『翼ある蛇』で死を見る。『喪失した少女』と『チャタレー夫人の恋人』などの小説のテーマは初期の小説の繰り返しと考えると、それぞれの局面で葛藤が生ずるが、それが自己の特別なイメージを鼓舞し、イメージのそれぞれは現実と均衡を保とうとして、それがしばらくは成功するが、最後には失敗するというパターンを展開することとなるというのが、その要旨である。⁸

ロレンス自身、1922年のエドワード・ガーネットに宛てた手紙で、その魂を母

親に握られた息子が魂と肉体の分裂に悩んで自分を見失い一種の「死」に至る小説という要旨を述べている。⁹ 母との繋がりがいかに生涯のダイナミックな愛の原型となるかを『無意識の幻想』で著したロレンスはまた、それゆえに『息子と恋人』で描いた母との理想的な愛で結ばれた「性に苦しめられて生涯をおえる」息子なのである。¹⁰

4. 文明の畏

ロレンスは巷に溢れている「男」がいかに「絶望」したままで生きており、そのことに気づかないで生きているか、あるいは気づいていてもそれに対峙する勇氣を持たないで生きていると考えた。そのような虚無的な男達が現代の「文明」をこれまでに築いたのだから、その「文明」が人間に良いものである筈がないことを小説のなかで描いてきた。ロレンスの小説は節目節目で変化するのは作家自身の「成長」の賜物である。ロレンスに見られる「種」の比喻は土に撒かれて芽を出し成長することを象徴している。¹¹

ミレットは『虹』が『息子と恋人』の自然主義を脱して「ロレンスの主要な手法上の成果である独創的な心理話法へと向かう新しい方向を示しているばかりでなく、それ以降の彼の性にたいする態度を解くカギを含んでいる」とも述べている。(257) ある意味でロレンスの内部の分裂と矛盾は極端な形で小説に顕われて来て、それがミレットの言う、ロレンスの後期の作品に「男根崇拜意識」と「男性優位主義倫理」の顕われと考えたことへ通じている。その原因はロレンスの手紙でも明らかなように、多岐に亙った女性との付き合いやフェミニズム思想を抱いていた女性達との付き合いが影響していることも明らかである。

ミレットは小説の『虹』にロレンスが複雑な介入の仕方での女性の自立を阻んでいると論証する。その理由は『虹』と『恋する女たち』を執筆の時期はロレンスの生涯で画期的なフリーダとの出会いから結婚へと移行する時期であった。だがロレンスが『虹』を書き始めた頃、時代は第一次フェミニズムの最中であり、ロレンスはそれ以前から婦人参政権論者の闘士のアリス・ダックスやブランチ・ジェニングスやクロイドンの小学校の同僚のヘレン・コークとの付き合いで恐るべき女性たちへの「防御姿勢を強めていた頃である」と指摘する。(260)『虹』の中でアーシュラは祖母のリディア・ブラングウィンや母親のアンナ・ブラングウィンと続く親子三代の母系制家族の血を継ぐ現代のフェミニストという設定で新しい女の期待が注がれる。その血はアーシュラの母も祖母からのものであり、彼女たちはヴィクトリア朝の性的禁圧は皆目なきに等しく描かれる。その証拠にこ

の小説で子宮はリンカン聖堂のアーチや月とともに精神的なものおよび超自然的なもののシンボルになっている。しかも小説中ではリディアの夫のトムがいかにも父権をかざしてみてもそれが愚かしいことだと一笑に付されてしまう有り様という風に描かれているところにもロレンス自身、この頃は父権制的な偏見がないことも認めている。(258)しかし母や祖母の限界を超えて勤めに出、大学教育も受けるのにアーシュラに関する限り、「共感と嫌悪」のアンビバレンスな態度で接していると批判する。それはアーシュラがリディアやアンのような神秘的な生活の支配力と出産する能力がありながらその上に「男の世界」で生きて成功する能力のあることだと述べている。(259-260)ロレンスのアーシュラに関する心理は、強い女の系譜のなかでいかに男の主体性を獲得するかの紆余曲折を見る思いがするが、この微妙な心理的抑圧がロレンスに「男性優位」という極端な指向を促すこととなるという見解である。

ロレンスの、女性が高等教育を受けることに対する意見は、幼友達のジェシー・チェインパースへのアドバイスに見たように保守的と受け取れるが、それはロレンスの経験からのものようである。¹² 学校とは名ばかりで子供にとっては刑務所のような場所で働く絶望的な環境はロレンスがクロイドンの小学校に勤務したときの経験であり、小学校教師の経験が「人々の教育」で書いた悲惨な奴隷製造所の片棒担ぎであったと自戒したように、アーシュラも「教育」そのものに強い懐疑を持ち始めるのであった。惜しむらくは『虹』で強靭なフェミニストであったアーシュラは一転してその悲惨な経験からの落胆と失墜から『恋する女たち』では悪い環境を改革するどころかさらに安易に男との結婚へ走ってしまうことである。『チャタレー夫人の恋人』においても、コニーの教育に関しては芸術を愛することの記述と、男友達との付き合いから得た知識ていどの「教養」しか授けていないに止まっている。

5. 「女から産まれた男」

『女から生まれる』を書いたアドリエンヌ・リッチは産業主義の文明が招いた不幸な母親と子供との関係を「本質的」なものとして、「父権制家族をつくるためには、この基本的な人間の単位に暴力が加えられる」とし、女の持つ意義、能力が飼い慣らされて、限定されるばかりでなく、女の生殖器、生命の基盤が父権的テクノロジーの主要な攻撃対象とないつている¹³と考えて、制度化された「母性」の解放を唱えた。

『母性という神話』に続いてエリザベス・バダンテールは『男とは何か』の中

で、「受胎した瞬間から、女性的にならないように闘いを始める」女のお腹で育ち、女から産まれる男児の使命は「生涯かかって差異化を成しとげる運命を背負っている」。男児は「母親、自分の中の女らしさ、赤ん坊の受け身の身分」の「三つの女らしさに逆らうことでしか生きる道がないので女ではない、赤ん坊ではない、同性愛者ではない」という三度の否定を通して、男の子は自分のアイデンティティを形成する。それゆえ、この三つの否定を実行することができない男達は絶望するのだ¹⁴と述べて、現代で男として、父親として生きることの困難さとその一方で、多様な生の選択が可能な現代における父権制の希薄さを立証して、男と女の敷居もなくすことに力あったといえるであろう。

6. 結論 「やさしさ」と「あたたかさ」をたづさえて

ミレットがロレンスを「父権制」という観点から批判するとき、ロレンスが小説に恣意的に持ち込んだモデルという印象を免れない。だが、それよりも、ロレンスの小説に描かれた、深い「父権制」の影響力をどのように考えるかは、いまだに論議的であると思われるし、それは制度や階級や性差から生まれる差別を逃れたいと無意識に望んでいたロレンスの迂遠な旅を再考することも一役買うことになると思う。

カーズウェルはロレンスを理解するには「プラトンに始まりゲアテで体現されたバランスのとれた人間という古典的なアイディアを嫌い、それを乗り越えようとした」ことを想起することの必要性をのべている。¹⁵ たしかにロレンスの旅の目的はこれまでの規範を乗り越えて、自らの足で、個人的な経験を通じてその肉体の充足のために満足のいく理解を自分で体現しようとしたことに始まる。だがその過程は或る意味ではわかりにくく、現代では、不合理で目的も曖昧という印象を免れない。pilgrimage「巡礼」とは現代人に馴染みのない言葉でもある。しかもカーズウェルがマリーの「女の息子」に対してどれほど効果的に一矢を報いたかは疑問である。

かようにロレンスを今日理解しがたいものにしてしている原因の一つには、ロレンスの文明批判を確固たるものにした迂遠な旅と、小説との関係である。ミレットのロレンス批判には旅のエッセイや文明批評の部分が抜け落ちているので、小説からのみでは判明しない、実人生の経験とその存在を賭けて費やした膨大な時間を見落とした。ロレンスは小説家であると同時に文明批評家であり、ロレンスの小説は旅の時間の結晶といって過言でない。

ミレットの『チャタレー夫人の恋人』観はロレンスがそれによって、「女性と

彼なりに和解し、10年近く前の1918年の作品『アーロンの杖』の構成に織り込んだ女性への敵愾心にたいして、最後の情熱をかたむけて和解の申し込みをしているように思われる」作品というものである。(238) ロレンスは周知のように『チャタレー夫人の恋人』の前に「やさしさ」と「あたたかさ」というタイトルを考えていた。

ロレンスはその生の終焉の二年前、その生まれ故郷、ノッティンガムへとおもむく。表向きは小説を書く題材探しであったろうが、真実のところはこころの旅である。それは近代社会が生んだ二元論的都会と農村、富裕階級と貧困、資本家と労働者という抜き差しならない構造に組み込まれた病んだ「個人」の回復を目指して出奔した故郷への帰還でもあったしまた、母性にたいする許しの姿勢でもあったかもしれない。

国には対立姿勢を示したが、どこにも属さない「個」に帰属することによって抵抗し、放浪によって国家への帰属意識は薄れても、つよく影響された母性に対する憎悪は父を許した自分の成長によっても緩和されていることは「ノッティンガムと炭坑街」でも明らかである。こころの底に凍てついていた「二元論」こそ憎悪を生む原因だったと自戒したともいえるのである。

『チャタレー夫人の恋人』はバダンテールの言う鉄骨男と骨抜き男、すなわちクリフォードとメラーズに象徴される。しかもここでは「本当の男になり損ねた男達」を描いているのである。ロレンスはアンドロジナスではなかったが、「父権制」に囚われた男の代表をもっとも毛嫌いした。そのような男はクリフォードのような「最後」の男であって、不毛な男なのだった。バダンテールの掲げた現代における理想の男のモデルはいまでも何百年も変わらずに生きている。それは「女々しいところのない」、「ボステキ」な、暴力に訴えてでも他者よりも強く、「競争に勝つ」というステレオタイプな男の典型であり、これがアメリカのスーパーマンのイメージに相当する。アメリカの創造したクリフォードとメラーズはバダンテールの言う、「鉄骨男」と「骨抜き男」である。¹⁶

クリフォードは戦争から身体ばかりでなくこころもぼろぼろになって帰還する。肉体的に傷ついたクリフォードの下半身麻痺で象徴されたものはいわば「鉄骨男」の危うさであり、ファルスに抛り所を求める器官としての男の脆さである。それは下半身麻痺したクリフォードがコニーに他の男の子供をつくる許可を与えたことに象徴された「脅え」であり、「生殖能力という至上命題に脅かされて暮しているために、快楽を知らない」。¹⁷ その人生は一生終わりのない戦いを続けることが男の使命と考えた、クリフォードに見るごとく、肉体の傷つきやすさを全身で感じ取ると、その脆弱さを鉄のように鍛えることで補おうとするのである。

メラーズはその反対の生活方式を取っているように見えるが、森の中で鉄砲を担いでいる姿はまさに「鉄骨男」と変わらない。ただし、メラーズは森の番人であり、肉体を鍛えるという思考はしない。いわば自然人で、ロレンスが理想的に設けた父親像と見ることもできるが、出世の踏み台から下ろされた原因となる女を嫌う類のエディプス的人間で、母親お気に入りの息子が『征服者』とならなかった場合の屈折がここに残っている。ロレンスが小説のタイトルに「やさしさ」または「あたたかさ」を考えたが、それはこのような自分の男性性を曝け出すことで、自分の理想とする男の姿の父親像を考えていたのではないだろうか。

ミレットのロレンス批判にある「父権制」とはこの意味でロレンスの求めた生命からもっともかけ離れた制度であり、ミレットが見逃したロレンスの「旅」は迂遠ではあったかもしれないが、制度の破壊に一役買ったのではないだろうか。

ラディカル・フェミニストの間では父権制という意味の重さが次第に浸透し、そこからジェンダーの問題まで発展する幅広い議論を呼ぶもととなった。だが一方で、ケイトミレットのロレンス批判にはロレンス自身その小説の創作にかけた時間的重みを考慮することが抜け落ちている。すなわちロレンスがその存在と時間をかけた世界の放浪は最終的に『チャタレー夫人の恋人』で故郷に戻ったところの旅を終えたあとで、「あたたかさ」と「やさしさ」というところの和解をおしてミレットの指弾した父権制を含めたや制度に対する文明批判の答えとなしたからである。

注

1. 『フェミニズム』江原由美子・金子淑子編 新曜社 1997年 117頁
2. 同上 23頁
3. 同上 25頁
4. Catherine Carswell, *The Savage Pilgrimage*, Dorothy Brett, *Lawrence and Brett: A Friendship*, Frieda Lawrence, *Not I but the Wind* を参照のこと。
5. *The Letters of D.H.Lawrence*, (London: William Heinemann), 1956, Introduction by Aldous Huxley p.9
6. Kate Millet, *Sexual Politics*, (New York: Doubleday & Company, Inc.), 1970, p.25 以下、本文からの引用はこのテキストに拠り、()内の頁数で示した。日本語訳は『性の政治学』ドメス出版 1997年版を参照した。
7. Margaret Storch, *Sons and Adversaries: Women in William Blake and D.H.Lawrence* (Knoxville: The University of Tennessee Press), 1990, p.99

8. Margarete Beede Howe, *The Art of the Self in D.H.Lawrence* (Athens: Ohio University Press), 1977, p. 2
9. *The Letter of D.H.Lawrence*, ed. by James T. Boulton (Cambridge: Cambridge University Press), 1969, p. 476

Dear Garnett,

Your letter has just come. I hasten to tell you I sent the MS. Of the Paul Morel novel to Duckworth, registered, yesterday. And I want to defend it, quick. I wrote it again, pruning it and shaping it and filling it in. I tell you it has got form-*form* : haven't I made it patiently, out of sweat as well as blood. It follows this idea: a woman of character and refinement goes into the lower class, and has no satisfaction in her own life. She has had a passion for her husband, so the children are born of passion, and have heaps of vitality. But as her sons grow up she selects them as lovers-first the eldest, then the second. These sons are *urged* into life by their reciprocal love of their mother- urged on and on. But when they come to manhood, they can't love, because their mother is the strongest power in their lives, and holds them...

10. J.Middleton Murry, *D.H.Lawrence: Son of Woman* (London: Jonathan Cape) 1980, p.21

11. 聖書 新共同訳 新約聖書 27-28頁参照。

『虹』、『恋する女たち』、『チャタレー夫人の恋人』でのヒロインの再生はマタイによる福音書の、一粒の種が地に落ちて実を結ぶ生の喩からヒントを得たものと思われる。

12. 『若き日のD.H.ロレンス』67-68頁

ジェシーが大学入学資格試験を受け、学位をとりたいという望みを語ったのにたいするロレンスの発言は女性の高等教育にたいする偏見の現われである。

13. Adrienne Rich, *of Woman Born* (New York: Northon & Company), 1976, p.127

14. Elizabeth Badinter (エリザベス・バダンテール) 『XY 男とは何か』1997年 筑摩書房 42頁

15. Catherine Carswell, *The Savage Pilgrimage* (London: Cambridge University Press), 1923, p.114

16. 『XY 男とは何なにか』162-163頁 バダンテール

17. 同上

